

## ドマリ語エルサレム方言話者のアイデンティティ行為の変化

北村萌（東京大学大学院／日本学術振興会）

本発表は、Croft (2003) の枠組みに則り、ドマリ語エルサレム方言話者のアイデンティティ行為の変化について考察する。ドマリ語はインド・アーリア語に属する言語で、話者はインド中原から移住を繰り返し現在は中東地域に散住するドム人である。ドマリ語エルサレム方言は、アラビア語へのシフトが進んでおり、話者は高齢層の数人が残るのみという深刻な消滅危機の状況にある。Croft (2003) は、混合言語などの言語接触下で生じる言語を対象に、アイデンティティ行為（個人が特定の社会状況で用いる言語形式を選択すること）が言語構造にどのように反映されるかを示し、基礎語彙とアイデンティティ行為に一貫した関連性があることを指摘した。

ドマリ語エルサレム方言を保持する最後の世代である話者への調査結果からは、語順や語彙、音韻にまでアラビア語との言語接触による変化が見られる一方で、基礎語彙にはインド・アーリア語起源の語が保持されていることが分かる。従ってこの世代の話者は、アラブ人社会からの圧力を受けつつも、ドム人コミュニティ内においてはドム人社会へのアイデンティティ行為が優位であったと推定できる。しかし 1940 年頃以降、エルサレムのドム人コミュニティにおいて急速にアラビア語へのシフトが進んだ。つまり、ドム人コミュニティ内においてもドム人社会ではなく、アラブ人社会へのアイデンティティ行為が優位になったのである。この背景には、1920 年以降のイギリス委任統治下において定住化が進んだことや、1967 年以降のイスラエル政府統治下においてアラビア語による学校教育が導入されたことがあると推定できる。

Croft, William. 2003. Mixed languages and acts of identity: An evolutionary approach. In: *The Mixed Language Debate: Theoretical and Empirical Advances*, Yaron Matras and Peter Bakker (eds.), 41–72